

新年を迎えて



会長 中野 宏*

明けましておめでとうございます。会員の皆様には、それぞれのご抱負を持って新しい年をお迎えのことと存じます。

昨昭和 48 年を顧みますと、鉄鋼業界は不況から脱出し、旺盛な需要に対処してのフル生産が続き、粗鋼生産は 1 億トンの大台に乗りました。しかし 11 月から俄かに襲った石油危機は、鉄鋼業のみならず日本経済全体に深刻な影響を与えるものであり、私どもは新たな覚悟をもつてこの大きな苦難を乗り越えて行かねばなりません。

この非常に drastic な形で現れた石油不足は、短期的問題としてこれが日本経済にどのような影響を及ぼし、いつまで続くか予断を許さぬものがありますが、長期的に見ての資源・エネルギー問題は、全人類にとって、とくにわが国にとって重大問題であることは、皆様がすでに十分認識されているとおりであります。

昨秋南アフリカで開催された国際鉄鋼協会総会に私も出席する機会を得ましたが、技術部門では直接製鉄が議題となつて真剣な討議が行なわれました。最近はその他いろいろな国際会議・学会で直接製鉄が論議されております。このことは、資源・エネルギー問題から、直接製鉄に対して従前に増す強い関心を世界各国が寄せ、熱心に研究し検討していることを示すものでありましょう。もちろん、直接製鉄が経済的に成立つための諸条件からみて、わが国では実現しにくい事情はあるにしても、もう一度広い視野に立ち、観点を改めて、この問題を見直す必要があるのではないのでしょうか。

直接製鉄はひとつの例に過ぎません。鉄鋼産業の量的拡大に対する制約条件がいよいよ厳しくなりつつある今日、鉄鋼に関する科学・技術にたずさわる私どもとしては、発想を新たにして仕事に取り組み、世界的に技術を先取りして行く努力がますます必要だと思えます。当協会をひとつの場として力を合わせ、大いに切磋琢磨して行こうではありませんか。

さてここで、当協会の昨年におけるおもな活動状況を振り返つてみたいと思えます。まず、一昨年末に実施しました本協会事業に関するアンケート調査ですが、その集計結果から見ますと、大勢として現在の協会運営方針ならびに諸活動に対してご支持をいただいていると考えられますが、なお全般あるいは個々の点についてのご批判・ご要望・改善案など貴重なご意見を少なからず頂戴しており、感謝に耐えません。これらについては理事会・委員会等において検討し、ご意見に基づいて直ちに改善できるものはすでに実行に移しており、時間をかけて検討を要するものについては更に審議を重ねておりますが、いずれにせよ今後の協会運営に当り、十分勘案させていただく所存であります。

会誌「鉄と鋼」の特集号として、昨年は「計測」および「圧延技術の進歩」を発行しましたが、タイムリーなテーマをとりあげた編集として、幸いにご好評を得ました。特集号を含めての会誌の内容充実と、読者に裨益するところ多い出版物刊行の企画に、一層の努力をいたしております。

講演大会については、昨年秋季（第 86 回）大会では発表件数が 400 件を超えるという盛況を見ました。今後とも会員の皆様のご研鑽により、ますます内容が豊かで優れた大会となることを期待いたします。

* 日本鋼管(株)相談役

従来から高い評価を受けております西山記念技術講座については、各支部からの要望もあつて昨年からは東京、大阪以外の地方でも開催することとし、まず広島で実施しました。皆様のご支援により、更に充実したものといたしたいと思います。

次に研究活動についてですが、政府のいわゆる大型プロジェクト研究のひとつとして、「高温還元ガス利用による直接製鉄技術の研究開発」が昨年開始され、当協会はその中の「トータルシステムの研究開発」を担当して7月から研究活動に入りました。その他、共同研究会、鉄鋼基礎共同研究会をはじめ各種の委員会は各分野ごとに活潑な活動を続け、多くの成果を挙げております。昭和46年から通産省の補助金を受けて実施してきました「焼結排煙脱硫試験」は実験が完了し、その成果が昨秋の講演大会において発表されましたが、一般に環境対策技術は重要課題であり、共同研究会の各部会でもそれぞれの立場から問題に取り組み、鋭意検討が続けられております。なお、新規の研究組織として「鉄鋼科学技術史委員会」が発足し、更に鉄鋼基礎共同研究会の中に「特殊精錬部会」を新設することになり準備が進められております。

国際技術交流も引続き活潑に行なわれました。とくに第4回日ソ製鋼物理化学シンポジウム、第4回真空冶金国際会議、第4回エレクトロ・スラグ・リメルティング・シンポジウムが、当協会主催または関係他学会と共催のもとに5月から6月にかけて東京で開催されましたが、いずれにおいても有益な研究発表とともに活潑な討論が繰り広げられました。一方、海外における諸学会・会議にも昨年も多くの会員の方々が参加されましたが、協会としても東南アジア鉄鋼協会の「電気炉」・「圧延」に関するセミナー（3月）「還元鉄」・「酸素の利用法」に関するシンポジウム（9月）に積極的に参加したのをはじめ、UNIDO（国連工業開発機構）主催の第4回鉄鋼シンポジウム（10月、ブラジル）への参加についても国内のまとめ役になるなど、開発途上国との技術面での協調にも力を入れております。また昭和45年に当協会が主催した鉄鋼科学技術国際会議の第2回に相当する“International Iron and Steel Congress 1974”が本年5月にドイツで開催されますので、これについても積極的に協力しつつあります。更に、中華人民共和国およびソ連から視察団が来日し、標準化に関して意見交換が行なわれました。なお中国からの視察団とは技術交流一般についても話合いがなされました。

さて、めまぐるしく変化する複雑な世界経済の中で、とくに本年は一層困難な問題に対処して行かねばなりません。人間には今日までの進歩・繁栄を支えてきた科学技術の発展・開発力という強い底力があります。この力を自覚し、たゆまぬ努力を重ねることによつて、現在は非常に悲観的に見える問題でも必らずや解決の途が開けて来るものと信じます。

皆様の一層のご活躍・ご研鑽に期待するとともに、ご多幸をお祈りしてご挨拶といたします。